平山婆

田中貢太郎

福岡県嘉穂(かほ)郡漆生(うるう)村に平山と云う処があって、そこに坑夫の一家が住んでいた。家族は坑夫の息子夫婦とその両親の四人であった。

明治末季比(ごろ)、その両親夫婦、即(すなわ)ちお爺さんとお婆さんが、ちょっとした病気で僅(わず)かの間に死んでしまった。

ところで、その爺さんと婆さんが死んでから間もない時のこと、そこの息子の細君が何かの用事で壁厨(おしいれ)を開けたが、開けるなり、

「わ」

と云って外へ飛び出した。庭では息子が薪を割っていた。息子はその声に驚いて、

「何だ、どうしたのだ」

と云って聞いたが、細君は真蒼な顔をして顫えているばかりで何も云わなかった。そこで息子が又聞いた。

「おい、どうしたのだ、何かあったのか」

「お爺さんとお婆さんがおった」

と云って、細君は家の中を恐ろしそうに見た。息子はばかばかしかった。

「ばかだなあ、死んでしまった者が、どうしておる、神経だよ」

「神経じゃないよ、ほんとだよ、嘘と思や往って見るがいい」

「ばかだなあ、今の世に、そんな事があるものか」

「だって、ほんとだよ、往ってみるがいい」

細君の物脅えの顔色が治まらないので、息子はとうとう上へあがって、細君の締め残してあった壁厨（おしいれ）の襖を開けた。壁厨の中にはお爺さんとお婆さんが並んで、行儀よく坐っていた。息子もそれにはぎょっとしたが、家長として責任があった。

「何か云いたいことがあるかね、あるなら云ってもらおう、そんなことをせられては、みっともない」

と云うと二人の姿はぱっと消えてしまった。

夜になって細君が蒲団を出そうと思って壁厨を開け

た。壁厨の中には昼間のとおりにお爺さんとお婆さんが坐っていた。細君は夫が傍にいるので気が強かった。
「そんなに、何時（いつ）も出てどうします、困るじゃありませんか」
　細君は二人にかまわずさっさと蒲団を出そうとした。すると二人の姿は消えてしまった。
　朝になって細君が蒲団をしまおうとしてその壁厨を開けると、また二人がその中に坐っていた。
　それから昼でも夜でも、壁厨を開けさえすれば、二人の坐っている姿が見えたが、ただ坐っているばかりで何もしなかった。この壁厨の怪異は、やがて村中の

評判になり、村の人はそれを平山婆（ひらやまばば）と呼んだ。

平山婆の噂があまり高くなったので、息子夫婦はそこにいられなくなって、別の炭坑地へ引越したが、そこにも爺さんと婆さんがやはり壁厨の中に姿を見せるので、又別の家へ移ったが、そこへも爺さんと婆さんは蹤（つ）いて来た。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。